

調査の経緯と報告書の内容

小林 久高

フランスの思想家、レジス・ドゥブレはこんなことを言う。「共和国の学校は知性豊かな失業者を生み出すと言われ、デモクラシーの学校は競争力のある馬鹿者を育成している」。この「共和国」はフランスで、「デモクラシー」はアメリカなのだが、フランスの大学は知性豊かな失業者を作り、アメリカの大学は競争力のある馬鹿を作るというわけである。彼一流のアメリカ的なものの批判である。

新島襄もまた、こんなことを言う。「教育の目的は智徳併行にして人物養成の一点に止まり。人材養成にあらず、人物養成の意なり」。

新島やドゥブレにこんなふうに言われると、「人材育成が大事だ!」というFDの立場は手放しで賞賛しにくくなる。時代の要請としてはFDは必要かもしれない。しかしよく考えて進めなければそのマイナスの効果も大きいことを2人は述べているからである。施策の顕在的な順機能だけでなく潜在的な逆機能もしっかりと把握してFD活動を進めていくことが重要と思われる。

そんな問題意識に基づき、昨年、卒業時調査にいくつかの項目を加えデータを集めることにした。その主なものは、技能の習熟だけでなく教養や知識人としての成長に関わる項目である。教員との関係、大学や学部への愛着に関わる項目も含めることにした。

今回の報告書には、このような視点で得られた調査データの分析結果が掲載されている。執筆者4人は、これまでこの調査にかかわってきた者たちである。最初の堺氏は、調査全体の結果の概要をまとめている。次の西丸氏は、学生の成績や能力向上感が何によって決まるのかを分析している。次の猿渡氏は「どんな職業につきたいか」という学生の職業的価値意識に関して分析している。最後の金氏は、学生の大学や学部への愛着について分析している。

すべての分析から見えてきたことは、教員と学生間の緊密な関係がさまざまな点においてきわめて重要ということである。そのような関係が基礎にあってはじめて、いろいろな活動が意味をなす。これからのFD活動を考える際には、この深層にある要因をきちんと抑えておく必要がある。新たに導入されるさまざまな施策のために教員の余裕がなくなり、関係そのものの構築が難しくなれば、その施策は本末転倒のものとなってしまうかねないからである。

本報告書の末尾には、調査票と基礎集計が掲載されているので、今後の望ましき活動を考える際の資料としていただきたい。また、集められたデータは今後も分析可能な形で保存されているので、こちらも大いに活用していただきたい。

調査の概要は以下の通りである。

調査日：2012年3月21日

調査対象：2012年3月に卒業する同志社大学社会学部生

調査法：集合調査

有効回答数：351